

黒松内ブナ林の鳥類とその重要性

樋口 広芳

東京大学大学院農学生命科学研究科 生物多様性科学研究室

黒松内町ブナセンターの明石かおるさんによると、歌オブナ林ではこれまでに 90 種の鳥が観察されている (<http://homepage3.nifty.com/sapporo-wbsj/essay/essay0912.html>)。観察を続ければさらに多くの種を確認することになると思われるが、森林性鳥類が 90 種も観察されているというのは注目に値する。豊かな森林環境が存在していることの証しであると思われる。

本年（2011 年）6 月初旬に調査した状況からすると、春から夏にかけてはセンダイムシクイ、エゾムシクイ、コルリ、オオルリ、キビタキ、カッコウ、ツツドリなどの東南アジア方面から渡来する夏鳥が目につく。とくに、センダイムシクイとツツドリは、この地域の森林のあちこちでふつうに見聞きできる。本州をふくむ他地域で、この 2 種がこれほど高密度で生息しているところはそう多くない。

カッコウの仲間のツツドリは、おそらくこの地でセンダイムシクイに托卵しているため、両種がともに見聞きできることが多いのではないと思われる。北海道でツツドリは、本州のホトトギスと同様、ウグイスの巣にウグイスと同様の赤い卵を産みこむが (Higuchi & Sato 1984 Ibis 126 : 398-404)、ウグイス以外に、本州どうようセンダイムシクイにも托卵することが知られている (樋口 2011 『赤い卵のひみつ』小峰書店)。センダイムシクイに托卵する場合、センダイムシクイと同様の白っぽい卵を産みこむのか、それともウグイスへの托卵例のように赤あるいはオレンジ色の卵を産むのかが、現在、興味深い研究課題になっている。この問題を解くのに、この地は恰好の場所であると思われる。

センダイムシクイとエゾムシクイという近縁の 2 種が同一地域にすむという点も、注目される。この 2 種は生息環境や食物などの生活要求が近いいため、同じ地域にすむことはあまりない。本州などでは、センダイムシクイは低山帯に、エゾムシクイは亜高山帯に主にすむ。起伏に富む地形に豊かな森林が発達していることが、黒松内のブナ林に 2 種が共存することを可能にしているようだが、種間の競合がどのように回避されているのか、調べてみるのは興味深い。

ゴジュウカラ、ヤマガラ、シジュウカラ、アオジ、ウグイス、アオバト、クマゲラ、カケス、ハシブトガラスなどは、一年中、この地域にくらす留鳥か、季節的に数 10 km から数 100 km の中距離を移動する漂鳥である。アオバトやクマゲラは希少種で、豊かな森林の指標種ともいえる鳥である。しかし、この 2 種がこの地域の森林をどのように利用してい

るのかよくわかっていない。生息時期や利用する食物資源などを調べ、存続の条件を明らかにする必要がある。

以上のような理由から、黒松内のブナ林は鳥類の生態研究や保全上、非常に重要な存在であると思われる。永続的に保全されていくことが強く望まれる。

(2011年6月30日記)